



Tokkuuki No.01
COMIC MARKET 104

国辱の雌隷

-Fallen Kingdom-

こくじやく しれい

敗戦国のシスター、
ゴブリンと結婚させられる。(22年6月3日)

シスターとゴブリンの新婚生活 (22年8月1日)

敗戦国のシスター、
ゴブリンに仕込まれたドスケベ芸で娼館デビュー (24年1月31日)

囚われの女騎士、
快楽肉人形にされる (22年5月21日)

敗戦国の女騎士、
敵軍に全裸チャンバラで稽古を付けられる (23年6月29日)

敗戦国の女騎士、
和平条約締結を祝し敵国兵に処女を捧げる。(23年12月29日)

敗戦国の姫君、
触手により肛門を開発される (23年9月2日)

敗戦国の姫君、
広場でアナル調教の成果をお披露目される。(23年11月29日)

敗戦国の姫君、
ケツ穴調教が完了し性処理機能付きの家畜となる。(24年2月26日)

国辱の雌隷 (描き下ろし)

エイリスはこの王国で
最も憧れを抱かれています
人物だ。

戦争、飢餓、伝染病—
人々を悩ませる不安を払拭するため
いつも微笑みと祈りを捧げてくれる
麗しき聖女だ。

王国の神官

エイリス

雪のように濁りなく白い肌
絹糸のように美しい髪—
この王国で一番の淑女はと聞かれれば
誰もがエイリスの名を挙げる。
万人に対し慈愛の心を忘れない
清廉潔白な乙女の導きの元、
王国の人々は平和に暮らしていた。

しかし先の戦争により
王国は侵略された。
植民地と化した王国に対して
まず行われたのは
人々の結束力を弱めるための
改宗政策だった。



改宗にあたり
まず目を付けられたのは
人々の心の拠り所になっていた
エイリスだった。
信仰の象徴として
崇められていたエイリスに対し、
侵略国がとったのは
『血統の浄化』政策！

人々の前で
低俗な種族との婚姻を宣言され、
エイリスは信仰を集める淑女から
ゴブリンの苗床として、
身分を訂正された。
そしてエイリスは、
1年以内に妊娠、出産することを
義務づけられた。

当然この政策に
王国民から猛反発があったが、
これはエイリスが
自ら志願したことだと説明がなされると
人々は戸惑いながらも
この政策を受け入れるしかなかった。
愛する王国民の命が掛かっている手前、
エイリスは侵略国の政策を
自ら受け入れるしかなかったのだ。



エイリスの仕事はその日から
『ゴブリンと交尾をし子供を孕むこと』になった。
元々神に仕える身として、
貞操を守ってきたエイリスが初めて見たのは
人間の2倍はあるうかという
ゴブリンの禍々しい男根だった。



自らの身体を求めていきり立つそれを受け入れるため
人間よりも体格の小さいゴブリンに合わせて
健気に体勢を低くし、人生で一度きりの初体験を捧げる
準備をするエイリス。
ゴブリンはその状況を楽しむかのように
挿入までに時間をたっぷりかけた。
その耐えがたい凌辱感に震えるエイリスとは裏腹に、
女性器は挿入を受け入れやすくするために
愛液をたっぷりと分泌させた。





遂にゴブリンはエイリスの秘所に
自らの肉棒をねじりこんだ。
ただでさえ初めて行う生殖行為、
ゴブリンの突起が付いた男性器が
エイリスの肉壺を隅々まで刺激し、
エイリスは処女を散らすと同時に
人生初の絶頂を迎える。

脳内に押し寄せる快楽の波に吞まれる
エイリスに脇目も振らず、
おかまいなしにゴブリンは本能のままに
腰を打ち付け続ける。
初めて味わう雌の快楽。本来であれば
交わってはいけない種族同士の交尾だが、
体内を暴れまわる生殖器によって、
エイリスの体は本能的に自らの「つがい」が
彼であると認識してしまっていた。



なすすべなく、ゴブリンの欲望のままに
遺伝子を流し込まれてしまうエイリス。
彼女の体は本能的に快楽によって痙攣し、
ゴブリンの射精が完了するまでの
身動きを封じた。
自らの体内に精液を流し込む雄を
邪魔しないようにする
雌の身体的機能が意図せず働く。

ゴブリンの射精量は人間の5倍と言われ、
さらにその分泌液には快楽を増幅させる
媚薬成分が含まれている。
これは元々異種族に対しても種付けを
行うことが想定されたゴブリンならではの
身体的特徴である。
今まで色欲とは無縁の生活を送っていたエイリス。
この日の射精はエイリスの脳内と身体に
深く刻み付けられた。

エイリスとゴブリンの交尾は
休むことなく続けられた。
精力にあふれるゴブリンにとって、
エイリスの体は格好の遊び道具。
言葉の通じない相手に、
身振り手振りで体勢を指示され、エイリスは
ゴブリンが気持ちよく射精するための体位を
何通りも覚えこまされた。

何とか快楽に押し上げられない様に
男根が当たる場所を逸らそうとしても、
人間の雄と違い、
異種族との交尾をするために
進化してきたゴブリンの生殖器は
エイリスの快感のツボを
決して逃すことはなかった。

本来であればエイリスですら
腕力で圧倒できるような体格のゴブリンに
支配的な体制で自らの恥部を差し出し、犯される。
そして女性として最も屈辱的なのは
自らの望まない相手から注ぎ込まれる子種。
エイリスは、ゴブリンと1日中繋がったままの
生活を送るようになった。



中でもエイリスが耐えがたかったのは、屋外での交尾だった。民衆の前にわざわざ連れ出され、かつて自分を崇拜していた王国民たちの面前で、白昼堂々生殖行為を強要させられた。

自分の主が射精をしやすいうように、自らその体を支えて立つよう命じられ自分たちが普段どのような性行為をしているかを、国民に見せつけさせられた。植民地と化したこの国の民たちに、この行為を阻止出来る者は一人もいない。エイリスが出来ることは、せめてこの痴態によって絶頂する姿を見ないでほしいと、見物人達に懇願することだけだった。

みないで♡
♡えええ♡

みないれ♡
♡りさいく♡

結婚から3カ月する頃には、
エイリスはその体に新しい命を授かっていた。
繁殖能力に優れたゴブリンの子供の成熟は
人間よりはるかに早く
種付けされた人間の雌は、
短い期間で何度でも妊娠が可能である。

初めは屈辱を感じていたエイリスも、
妊娠によって幸福感を抱いていた。
雌として、自分に新しい命を授けてくれた
優秀な雄を受け入れ
その伴侶となれたことに生物的な
充足感を得ていたのだった。

エイリスはこの感情を
愛だと勘違いしてしまっていたが
もはやその間違いを正せる人間は
この国には残されていないかった。
その後、エイリスはゴブリンの良き伴侶として
27人の子供を出産し
それらの子供とゴブリンと共に
貴族としての身分を与えられ、
王国民の血税によって優雅に暮らした。



王国は侵略国との戦いに敗れその支配下に置かれることとなった

王国民の心の支えとなっていた神官エイリスに目を付けた侵略国は、王国民の結束力を弱めるための政策としてエイリスとゴブリンの婚姻を命じ、1年以内に妊娠、出産することを義務付けた

エイリスがゴブリンと結婚した次の日から改宗政策の一環としてこの夫婦による「日課」が行われるようになった

そのあまりにむくく凌辱的な光景に城下町の人々は戸惑いながらも目を離すことが出来なかった

人々の為に折り全てを優しく受け止めてくれていた王国の女神は

結婚の翌日にはその豊かな乳を放り出され最も敏感な突起には隷属を示す大きなリングが通されていた

拘束具によって前傾姿勢となった上からゴブリンが騎乗し城下町の真ん中で妻となったエイリスの女性器に男根を挿入したまま腰の動きでエイリスに進行方向を指示する

ひと突きされるたびエイリスの女性器は愛液を石畳の道路にまき散らしそのシミが轍となって今までの道のりを示していた

白昼堂々で行われるこの忌々しい日課

散歩

エイリスは
ゴブリンを背中に乗せ
繋がったまま城下町を
1周しなければならぬ

それは
占領された王国民に
主従関係を
分からせるための
象徴的な政策だった

今まで自分たちが
信仰心を寄せていた女性が
惨めにゴブリンの肉棒を
受け入れるしかない姿は
分かりやすく人々に
絶望感を与えた

散歩には
ゴブリンの身を
守るために
衛兵が付けられたが
この衛兵もまた
かつて
エイリスを敬愛した
王国民であった

この恥辱を少しでも早く
終わらせてやろうと
手綱を引いてしまうと
かえって乳首を刺激し
エイリスを身悶えさせる
原因になってしまう

目の前で、かつて憧れた
王国の象徴である淑女が
犯されているのを
止めるどころか
護衛しなければならぬ状況は
エイリスを初め
これら衛兵をも苦しめた



そして公衆の面前で
ゴブリンは平然と
エイリスの子宮に
精液をぶちまけた
これがゴブリンと
エイリス夫婦にとって
初めての
種付け交尾だった

人間よりはるかに高い
生殖能力を持つ
ゴブリンの射精
その量と勢いは凄まじく
亀頭を押し付けられた
子宮口は
噴出する精液によって
震わされ
エイリスは王国民に
見守られながら
人生初の中出しで
ポルチオアクメをキめた
深い絶頂感で、足腰を
ガク付かせながらも
エイリスは
主人であるゴブリンを
背中から落とさない様に
踏ん張らなければ
ならない

ゴブリンは
溜まっている
残りの精液も
エイリスの胎内に
流し込めるよう
鈴口で子宮口を
ぐりぐりと何度か
なぞった後
また次の射精に向けて
エイリスの膣内を
掻き回し始めた

羞恥心から
なるべく早く散歩を
終わらせようと
懸命に歩き続けた
エイリスだったが
結局この日、人前で
5発もの中出しを
決められてしまった

結婚して3カ月もすると
成熟の早いゴブリンの胎児は
エイリスの中ですくすくと育ち
その体はふくよかで
下品なものに変えられていた

貴族階級を与えられた
夫婦がすることは
ただセックスのみ

日課を終え、
王国民から搾取されて
建てられた
夫婦の邸宅に帰れば、
今度は二人だけの
愛の儀式が始まる

この日ゴブリンは
エイリスに新しい
性行為の作法を
覚えこませていた

普段は上から
エイリスを凌辱する
だけだったが
この日はいきり立った
男根を見せつけるように
仰向けになり
ヒクつかせて
エイリスに合図をした

んほみ♡

おほみ♡

んほみ♡

んほみ♡

んほみ♡
んほみ♡

んほみ♡

んほみ♡

んほみ♡

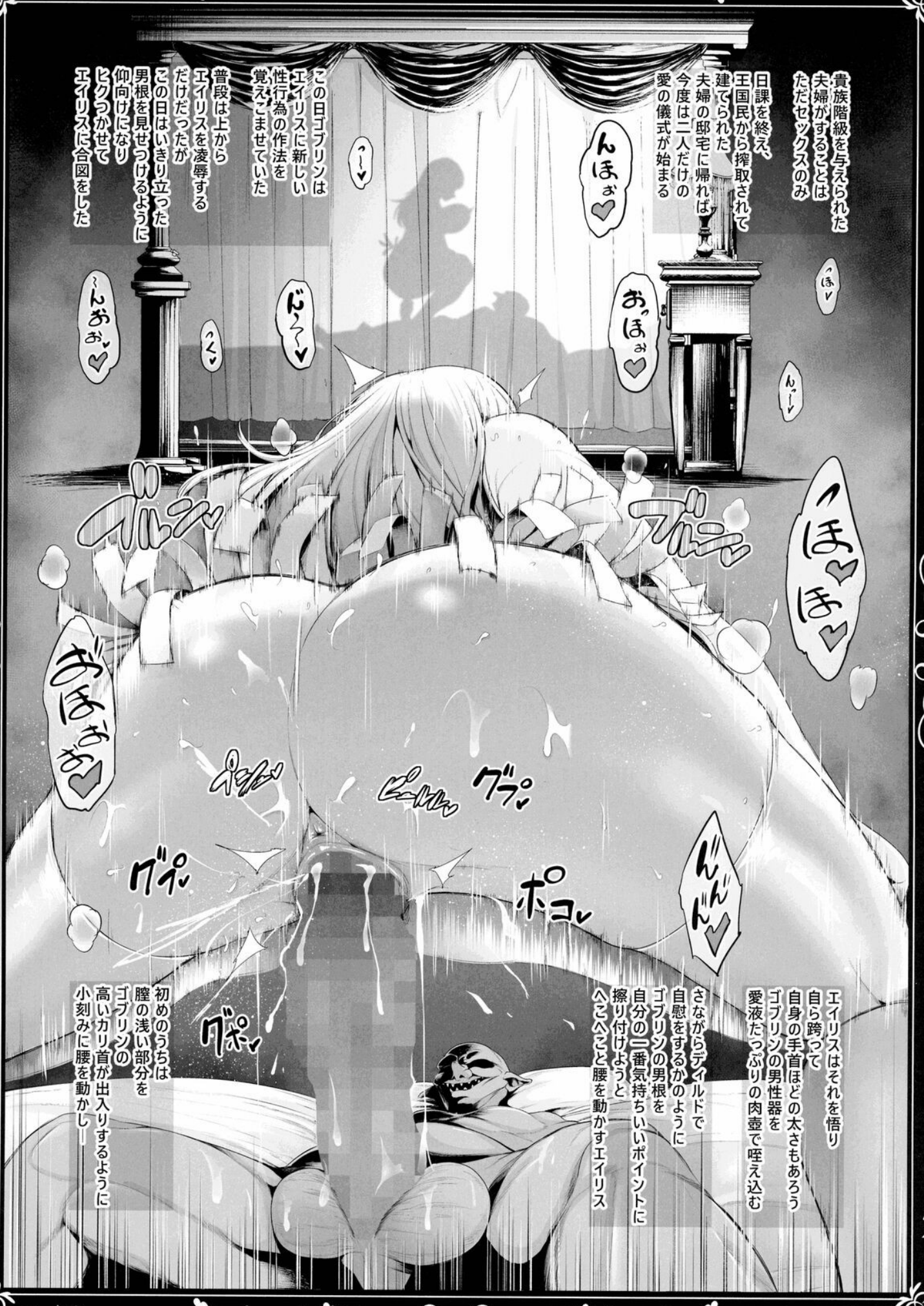
おほみ♡
おほみ♡

んほみ♡
んほみ♡

エイリスはそれを悟り
自ら跨って
自身の手首ほどの太さもあるう
ゴブリンの男性器を
愛液たっぶりの肉壺で咥え込む

さながらデイルドで
自慰をするかのように
ゴブリンの男根を
自分の一番気持ちいいポイントに
擦り付けようと
へこへこと腰を動かすエイリス

初めのうちは
膣の浅い部分を
ゴブリンの
高いカリ首が出入りするように
小刻みに腰を動かし





慣れてきたら
教え込まれた
『服従の姿勢』で
一気に肉棒を自らの
膣内に叩き込む

ゴブリンによって
散々耕されてきた最奥は
簡単にエイリスを
絶頂へと導き
その度に
だらしなく
脂の乗り切った体は
ブルンブルンと震えた



上の口からは
甘い息と深い絶頂による
うめき声を、
下の口からは
愛液と潮をバット中に
まき散らしながら
ひと際深い絶頂を迎える
エイリス

服従の姿勢で
ペニスを咥え込んだまま
動かなくなった
エイリスを見かね
ゴブリンは無理矢理
体制を変えさせた

ギシ

あゝ

どぼろおぼろ

おぼろ

どぼろおぼろ

ゴブリンのごつごつとした生殖器がそれらを隔々まで刺激しエイリスをさらに深い絶頂まで押しやる

日中の散歩とは違ひ
人目を気にしなくて良い
エイリスは
開発されきつた
臆や子宮から与えられる
快楽に身を任せ派手に
そして無様に絶頂を
し続けた

ゴブリンは臆奥に自身の遺伝子を流し込んだが既に身籠っているエイリスが妊娠することは無い

当初の改宗政策によってエイリスに命じられたことは「妊娠、出産すること」だった

既に妊娠したエイリスにとってこれらの性行為は無意味なこと命令、義務の範疇を超えていた

膣内から引き摺り出された
三人の体液にまみれた肉棒は
今度はエイリスの
口にねじ込まれる

イボや亀頭の裏など
隅々まで舌で舐め直し
尿道に残った
精液の残り汁をすすり出す
先ほどまで自分の膣内を
えぐり回していた男性器への
愛情と感謝を示す作法—
口の中を満たす男根への想いで
エイリスは再度絶頂した

唾液まみれになった
肉棒を見つめ
エイリスは下を高速で動かす
これも作法の1つ、
「おねだり」だ
これだけ射精してもまだ
自分を愛せる逞しい男性器で
もう一度交尾をして欲しいと
ゴブリンにせがむエイリス
侵略国に凌辱され
王国民の為にと身を張った
慈悲深き聖女エイリスの姿は
もうどこにも無く—

そこには
肉欲を満たすためなら
どんな下品なことでも
してしまうゴブリン専用の
性処理用妻の姿があった

べろべろべろべろ



王国への
侵略戦争が終わり、
帝国の歓楽街には
多くの娼館が建った。

敗戦国である
王国の女達は
調教がなされ、
このような娼館で
帝国の男達に
「奉仕」する仕事
が与えられた。

そんな娼館で、
一際人気を博した
娼婦がいた。

それが
帝国の改宗計画により、
ゴブリンと結婚を
させられた王国の神官
聖女エイリスだ。

植民地の貴族として
ゴブリンの夫と
子供をこさえる間、
労働階級にある
帝国男性への
奉仕活動の一環として、

エイリスはたびたび
この娼館で
男性たちへの
「見世物」となっていた。

エイリスを
引き連れて来たのは
二匹の調教師ゴブリン。
帝国によって
位が与えられた、
他国の女を従順な
性奴隷へと教育し、
管理する役割を与えられた
ゴブリンだ。

クリトリスを連結された
「手綱」で促され、
エイリスは元気に
乳房を揺らし、
会場の帝国男性に
手を振った。

王国の元聖女が
ゴブリンと結婚し、
何匹ものゴブリンを産み、
そして帝国の男達を
愉ませるためのだけの
娼婦として、
ゴブリンから調教を受け、
あられもない姿で、
こうして笑顔を振り撒く。
帝国男性にとって、
この見世物は別格だった。

ステージ中央に連れて
こられたエイリスは、
自身の性器を
丸出しにしたポーズで
魅をくねらせ始める。

各所に
取り付けられた装飾が、
エイリスの魅を
淫美に飾り立て、
男達をより扇情した。

調教師ゴブリン
によって仕込まれた
『勃起を促す舞』である。
男性達に向け腰をくねらす
エイリスの後ろから

調教師が
『指示棒』で
女性器を
擦り上げる。

拘束具によって
露わになったクリトリスが、
ゴブリンの性器を模した
指示棒の突起で弄ばれ、
エイリスは
情け無い声を上げながら
アクメを晒した。

調教師ゴブリンの
調教が行き届いて
いる証だ。
会場からは
大きな拍手が
送られる。

次に、
調教師が
取り出したのは
鼻フック。

アクメにより
全身を痙攣
させてもなお、
ポールを離さず
姿勢を保持する
エイリス。

うひいひい

PP4

PP4

PP4

PP4

PP4

半ば強引に
性液を絞り出す、
『御下劣ハキユームフェラ』

指示された通り
大きな音を立てて、
帝国男性の男根に
むしゃぶりつくエイリス。

射精中も
性液の更なる分泌を
促す様にピストン。
そして、
尿道に残った精子を
一滴も残さない様に
吸い上げる。

言う事をきちんと
聞けたエイリスに、
調教師は褒美として
エイリスの子宮口を
撫で回してやった。

エイリスの
絶頂と
帝国男性の
射精が
終わると、

エイリスは調教通り、
男性の排泄した精液を
舌の上で転がし
見せつけた。

これが、
ゴ布林によって
賤けられた、
属国の女としての
作法である。

男性達への
奉仕が終わると、
ゴ布林は

エイリスの眼前に
自身のいきり勃った
肉棒を見せつけた。

エイリスは
目の色を変え、
発情し切った女性器に
それを導く
そう、
この見世物最大の見せ場、
『ゴ布林による交尾ショー』
である。

皆様あゝあ
今からあゝあ

エイリスは
背中にゴ布林を乗せ、
自らの性器がしっかり
見える様にポーズを取り
観客達に交尾ショーの
開催を告げた。

ゴ布林は
その発声を聞くと
エイリスの性器に
肉棒を押し当て

ゴ布林様のお尻を
交尾していただく所を
ご覧いただきます

ほ

ドキ

ドキ

フム

あ

くさ

ん

そして一気に奥まで挿入した。

これまでの出し物で発情したエイリスの蜜壺は愛液を満載し、ガチガチでイボつきのゴブリンのちんぽをちゅるんと飲み込んだ。

いよいよ交尾ショーのスタートだ。

会場の期待は大きく膨れ、拍手が沸き起こった。

その拍手に応える様に、ゴ布林はエイリスの弱点を一突き。

堪らず潮を撒き散らすエイリス。調教師ゴブリンのファンサービスに男達は更に大きな拍手と歓声を送った。

おっ♡

おっ♡

おっ♡おっ♡

んっ♡おっ♡おっ♡

王国民の税金に支えられ、日夜ゴ布林との性行為しかしていないエイリス。調教され尽くしたエイリスはゴ布林と人間ではできない様な体位を次々と披露する。

調教師によって仕込まれた体位はどれも、自然な交尾ではなく、ショーの為に如何に卑猥で扇情的かを考えられた、謂わば「魅せるための交尾だ」。

ゴブリンの長い射精中も健気に片足を上げ、自らの女の部分を機される様をしっかりと観客に披露するエイリス。

当然ゴブリンの性行為が一回の射精で終わることもなく



いぼいぼ

ゴブリン達により仕込まれた卑猥なポーズでの交尾姿を次々と披露して、エイリスは会場の帝国男性達を満足させた。

侵略戦争に勝利し、
属国を手に入れた
帝国の男達に
与えられた特権。

帝国でこの様な
見世物が
流行するの
も
自然な流れであ

[illegible]

ゴブリンによって
飼育され、
植民地である
王国の税金に
生かされている
エイリスは、
誰の子供を孕んでも
問題ではない。

ゴブリンによって
散々弄ばれ、
抵抗できなくなった
エイリスの女性器に

無数の男が性液を流し込む
『公開無作為孕ませショー』も
この娼館ならではのサービス。

帝国の男達はこうして
支配した他国の女を
好きな様に犯し、
慰み者にする。

娼婦エイリスの
見世物ショーは、
エイリスが妊娠しても続き、
帝国の男達の
娯楽の一つとして
大盛況だったと言う。

おぎゅ

ふぎゅ

ぐ

ビク

ビク

ビク

ド

ド

王国騎士
カレナ

誇り高き騎士として
3度の戦を制し、王国に
栄光をもたらしたカレナは、
幼き頃から剣の道を志し、
人生を国の平和のために
捧げてきた。

しかし栄枯盛衰とはこの世の常。
カレナ率いる王国騎士団は
敵国に敗れてしまう。
騎士団の全滅は国内に広く伝えられ、
人々に絶望を与えた。
この機を境に、騎士団を率いていた
カレナの消息も不明となった。





カレナは敵国兵に
捕虜として捕らえられていた。
戦地で戦う男の中に女が一人。
敵国兵はカレナを殺さず捕らえ、
自国へと連れ帰った。
身を守っていた鎧や衣服は全て剥がれ、
恥部を隠せないよう拘束された。

普段なら一蹴できるような男に
胸や尻を弄ばれ辱めを受けながら
地下牢へと連行されるカレナ。
鎧で隠してきた肉体を晒され、
否が応にも今まで無視してきた
女としての自覚と羞恥心を
掻き立てられた。
地下牢最深部に到着したカレナには、
さらに耐え難い凌辱が待ち構えていた。

豊満に育った肉体を縛り上げられ、
男達のちよつと目の高さに
恥部が来るように吊るされる。
騎士として生まれ育ったカレナにとって
雌として男達に好奇の目で見られるのは
初めての体験だった。

視界を奪われ、不安定な体制で
局部を晒される耐えがたい恥辱に
全身が火照るカレナ。
その光景をひとしきり楽しんだ
男達は次に、小瓶に詰められた液体を
手に取った。

ド
イ...

その国に古くから伝わる媚薬。
肌塗布すればたちまち
神経は研ぎ澄まされ、
わずかな刺激でも身悶えするほどの
快楽へと変える劇薬。
男を知らないカレナの身体に、
男達は丁寧なように
この媚薬を塗り込んでいった。

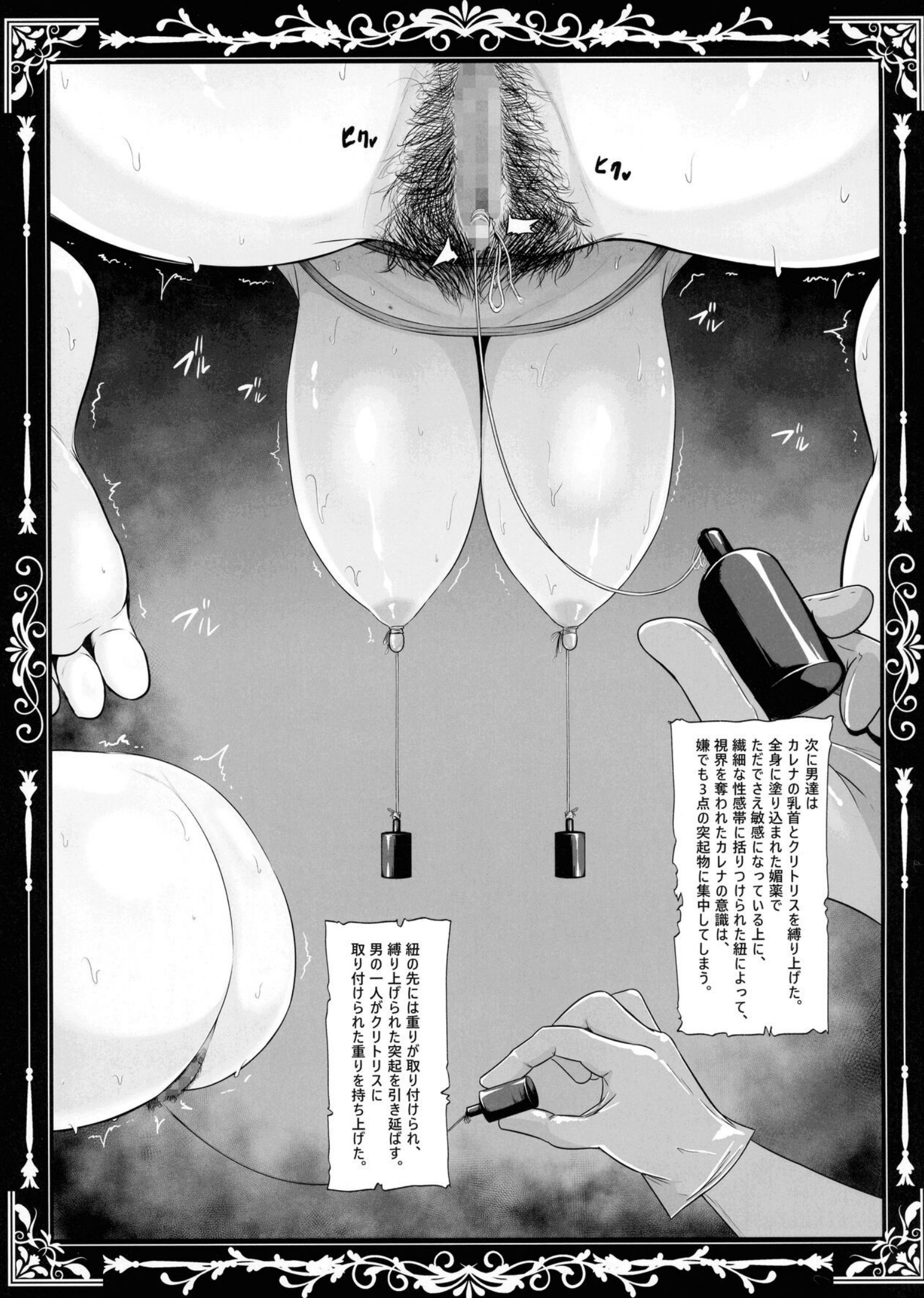
乳首や性器などの性感帯には
念入りに、何度も何度も
媚薬が塗り込まれた。
両の突起を弄ばれる度にカレナは
意図せず甘い声を上げてしまう。
それが不覚にも、男達をより一層
楽しませてしまう原因になった。

一生を剣の道に捧げてきた
カレナには、生まれて初めて味わう
この感覚への対処法は無かった。
男達の思うままに体を弄られ、
そのたびにただただ身悶えし、
情けなく鳴くことしか出来ない。

特に女性器には念入りに、
そして丁寧に媚薬が塗り込まれた。
クリトリスはつまんだり、転がすように、
カレナの反応を楽しみながら。
処女膜は傷つけない様に粘膜を広げられ、
ひだの裏まで指先でじっくりと
なぞるように塗り込まれた。

ぱあゝ

未だかつて
自分でも触ったことが
無いような場所まで弄られ、
見ず知らずの男に委ねるしかない
情けない体勢のカレナ。
男のその丁寧な手つきがまた、
カレナの心を追い込んだ。



次に男達は
カレナの乳首とクリトリスを縛り上げた。
全身に塗り込まれた媚薬で
ただでさえ敏感になっている上に、
繊細な性感帯に括りつけられた紐によって、
視界を奪われたカレナの意識は、
嫌でも3点の突起物に集中してしまう。

紐の先には重りが取り付けられ、
縛り上げられた突起を引き延ばす。
男の一人がクリトリスに
取り付けられた重りを持ち上げた。

男が重りを手放し
振り子のように振動させ始めた。
その強烈な刺激により、カレナは
人生で初めての絶頂を迎えた。
敵の男達の目の前で
みっともない姿を晒すまいと緊張するが、
雌として作られた
自身の身体から与えられる快楽に
抗う余地はなかった。

敏感になったクリトリスへ、
無慈悲に刺激が与えられ続ける。
全体重を天井から吊るされた
ロープに頼るしかないカレナが
身をよじる度、
全身が振り子のように振動し、
さらにその振動で取り付けられた
重りが振動を始めてしまう。

振動を始めた重りが
また乳首とクリトリスを刺激し、
カレナは2度目の絶頂を迎える。
絶頂を迎えたカレナの体は大きく震え、
また重りに振動を与えてしまう。
一度始まった絶頂が次の絶頂を招いてしまう
無限の悪循環にカレナは囚われてしまった。



薄暗い地下牢の隅で
嬌声を上げ続けるカレナ。
もはや騎士としての誇り高き姿はなく、
天井からぶら下げられた
快樂肉人形と化していた。
男達の気が済むまで、
カレナは自らの力ではこの状態を
抜け出すことは決して出来ない。
気を失えばまた重りを揺らされ、
終わりのない絶頂の渦の中へ
強制的に引き戻される。

女として最も隠したい部分を
さらけ出したまま、
カレナはこの後三日三晩
この責め苦を受け続けた。
しかしこれはまだ、
このあとカレナが受ける恥辱の
ほんの一部に過ぎなかった。

地下室での
調教を終えたカレナには、
帝国軍兵舎の中庭で、
新たな調教が
待っていた。

『帝国兵など
両の手を使わずとも勝てる』
と豪語していたカレナの話
を耳にした彼らは、
カレナが捕虜となった今、
それを見て貰おうと
彼女を拘束し裸で外に出させた。

たっぷりと媚薬で調教され、
風が当たるだけでも身悶えるほど
敏感になった3つの突起には
紐を括りつけられ、
その先に模擬刀をぶら下げられた。

今すぐにも逃げ出したい
カレナだったが、
その場には生き残った
王国騎士団の団員が居た。
敵国の兵士に囲まれた環境で、
カレナは騎士団の長として
この恥辱を受け入れるしかなかった。

括りつけられた模擬刀で試合を行い、
相手の身体どこかに
触れられれば勝ちとなるが
この体勢と条件！
この後カレナに待ち受けるのは、
試合という名の
凌辱ショーであるということ
誰の目にも明らかだった。



かつて軍神として、戦場で無類の剣捌きを見せっていたカレナだったが、今ここにいるのは、全裸で情けなく腰をヒクつかせ、だらしない育った胸を揺らしながら必死に模擬刀を振るう、売女も顔負けの浅ましい女の姿だった。



部下達を人質に取られ、試合を投げ出すことも出来ないカレナは、必死になって剣を振った。女として隠すべき場所をすべて曝け出し、ガニ股で乳を揺らしながら突進してくるカレナを、敵役の兵士は嘲笑し、軽くいなし続ける。

剣が交わる度、取り付けられた紐を辿ってカレナは乳首とクリトリスに刺激を受け、甘い声を漏らしてしまう。

地下室で受けた調教によって、ただでさえ模擬刀を3点で支えているだけでも、絶頂してしまうようなのに、捕らえられた部下たちの為に、必死で体をくねらせて剣をふるい続けるしかないカレナの頭は、恥辱と強制的に与えられる快楽で爆発寸前だった。

次の瞬間、
身じろぐカレナの模擬刀目指して
激しい衝撃が走る。
男の腕で振り下ろされた剣撃は、
一撃でカレナを絶頂させるのには
十分だった。
あまりの刺激に、腰を折り曲げ
少しでも部下たちに情けない所を
見せまいと絶頂を抑え込もう
とするカレナだったが、帝国兵は
それを許さなかった。

腰を逃がさないように
後ろから抑えられ、
敏感に育て上げられた
クリトリスと乳首が
模擬刀ごしに激しく
揺さぶられる。

身を震わせ泣き叫び敗北を認めても、
兵士は手を緩めなかった。
子供をあやすように声を掛け、
あざ笑いながら
剣撃を加え続ける帝国兵。
そのたびにカレナの身体は
激しく痙攣し、本人の意思に反し
性的快楽を生み出してしまふ。



情けなく野太い声を上げ、
カレナは潮を吹いて絶頂した。
ひと際深く長い絶頂！
騎士として、女として、
敗北し醜態を晒す。
今まで人目に付かない所で
行われていた調教と違い、
屋外での恥辱と絶頂は、
カレナの心に
『敗北』という2文字を
強く刻み付けた。



その後
試合に負けたカレナは、
兵舎から連れ出され
新たな凌辱を
受けることとなる。



鍛え直しという名目で、
逆立ちの状態で拘束され、
街中を引き回されるカレナ。
敵国の街中の人々に向かって
乳房や陰部を全開に曝け出され、
頭が焼き切れるほどの
羞恥に耐えながらも、
カレナは黙々と誘導されるままに
前へ進むしかなかった。

騎士としても敗れ
女としての尊厳も
踏みにじられながらも
自身の性器は愛液を
分泌し続ける。
カレナは何より
そんな自分が
情けなかった。

ぐぐぐ

ヒョ

ヒョ

王国騎士の醜態を一目見ようと野次馬が集まり切ったところで、敵兵はカレナをその場に留め、陰部へと鞭を打ち始めた。王国騎士団長カレナへの公開調教ショーの始まりだ。ただでさえ試合後で、敏感になったクリトリスに、容赦のない鞭打ち。街中に、ベチベチと愛液を蓄えた性器への打撃音と、カレナの情けない喘ぎ声が響く。

カレナへ行われるこの調教は、あくまで敵国兵士から与えられたより強い剣士になるための訓練。性器へ指導を受けたカレナは、女として最悪な仕打ちを受けていながら、その慈悲の心に謝辞を述べなければならなかった。

産まれて一度も男性を受け入れたことのないまま、自由を奪われ、罵られ、弄ばれ続けたカレナの女性器は、もはやこんな仕打ちを受けていても勝手に悦んでしまう卑しいマゾ穴になり果てていた。

女性器を男たちの目の前に
高く晒し上げられたまま、
潮を吹いて絶頂、
体中を震わせて、
狂ったように股間から
愛液をそこら中にまき散らす
カレナのその姿は、
帝国から受けた調教の
徹底さを物語っていた。

3度の戦を制し、王国に
繁栄と栄光をもたらした
誇り高き軍神は、
こうして帝国によって
剣士としても、女としても
蹂躪され、
一匹の下劣なマゾ雌に
作り替えられてしまった。

カレナはそのまま
暫くの間
街の中心部で
股間に鞭を受けながら
まるで噴水のように
無様に潮を吹き続けた。

公開調教が終わると、カレナは恥部を晒した体勢でその場に放置された。少しでも動けばクリトリスと乳首が互いに引っ張り合うように細工をされ、絶頂すれば性器と共に肛門が痙攣し自動的に白旗を振る仕組みだ。無理な体制が続き体の力を緩めると、火照った乳首が締め上げられ絶頂。体勢を立て直すために腰を持ち上げようとすれば今度はクリトリスが引っ張り張られ絶頂。

人々が往来する大通りの道端で、無様な姿勢のまま、ただただ終わることのない甘イキを続け白旗を肛門で振り続けるカレナ。かつて騎士団を率い、最後まで戦い抜いた女騎士は、帝国の勝利を象徴するオブジェとして暫くの間道行く人々を愉しませたと言う。

王国の敗戦から
1年が経とうと
していた頃――
帝国の広場では、
とある式典が
執り行われる
こととなった。

調教の限りを尽くされ
蕩け切った乳首と
クリトリスで
手綱を引かれ
連れて来られたカレナ。

裸よりも恥ずかしい
女性の恥部が
丸出しになった衣服——
これが戦争で敗北した
被支配国民の女の《正装》
なのである。

連れてこられたのは、
帝国と王国の
和平条約締結記念式典会場。

待ち受けていたのは
敵国兵の中でも
二際屈強な大男だった。

その後ろには、
かつて戦場を共に
戦い抜いた部下たち。
式典への出席のため
小奇麗な服を纏わされていた。
着ているの服の差が、
カレラの羞恥心、
そして王国の男たちの
自尊心を蝕む。

これから行われる式典の内容を悟ったカレナだが、待ち受けるその陵辱を拒むことなく、出来るはずがなかった。

お立ち台に上げられた
カレナはまず、
集まった民衆に向かって
宣誓文を読まされた。

あ、そうして……
いかなる場合に

おーいおーい

宣誓文は
和平とは名ばかりの
一方的な支配を
宣言する
内容だった。

それを騎士として
恥すべき格好で
敵国民に対して
宣言させられる
カレナ。

股下にあてがわれた
男性器が、
期待で膨れ上がった
クリトリスに擦れ、
読み上げが詰まる度、
男根で早く読むよう
促される。

カクン

宣誓文を読み終わると
男に向けて自身の
生殖器を大きく広げ、
男性器が挿入しやすい
体制を取らされた。

帝国男性様のおせい
おうち●ぽろ●お

敗戦マングに
お恵み下さい

和平条約を受け入れた
王国と帝国との
友好の印として、
王国からカレナの
処女が捧げられるのだ。

帝国を誇る巨根が、
カレナの処女膜を
押し広げながら
ゆっくりにゆっくりに
挿入されていく。
塗りこまれた媚薬により
感度が上がった生殖器で
その感触を味わわされ、

押し寄せる快楽を
押し殺そうと
必死に耐える
カレナだったか

ぽろ

ニクニク

おせい

想像以上に
太く長いペニスが
カレナの最奥を貫き押し上げ、
まだ動かされてもいないうちに、
カレナは堪えきれず
緩やかに絶頂を迎えてしまう。

王国騎士団団長カレナの、
記念すべき処女喪失の
瞬間である。

生まれて初めての
性行為を見世物にされ、
恥辱に塗れたカレナだが、
本人の意思に反して
カレナの女性器は、
初めて味わう
男性器の快楽に悦び、
愛液を噴出させる。

その様子を見ていた
帝国国民は大いに喜び、
和平のために
処女を捧げたカレナの、
献身と友愛の心に
拍手を送った。

和平条約とは
名ばかりの
植民支配宣言

属国に成り果てた
王国国民に、
拒否権は無かった。

かつてカレナを
慕っていた
部下たちは、
見守ることしか
出来なかった。

処女を捧げた
カレナには、
返礼品として
帝国から記念品を
授与された。



和平の鐘

帝国に
 忠誠を誓った国の
 代表者に与えられる、
 友好の証。

帝国によって卑しく
 育て上げられた
 3つの突起に、
 それぞれひとつづつ、
 それが取り付けられた。

性快楽と羞恥で
 赤く腫れ上がる
 突起物を卑しく
 飾り立てる装飾品は、
 少しの振動で
 チリチリと鳴り、
 淫猥な三点を
 刺激し続ける。



大きなペニスを
 突き立てられた
 女性器と、クリトリス、
 乳首をヒクつかせながらも、
 これ以上
 帝国の男共を
 悦ばせまいと
 耐えるカレナ。

しかし、身震いする度に
 鐘が小さく鳴り、
 耐えるカレナを
 更に絶頂へと
 追い立てる。

和平の鐘の
 授与が終わると、
 男はそのまま
 カレナを抱き上げた。

自分の体を
 軽々と持ち上げる
 男の勇ましさに
 不意を取られたのも
 束の間



結合部を民衆に見せつけるように、抱き抱えられたままのピストン。

男性器は子宮を突き上げ、膣壁を抉り、

そして取り付けられた鐘が鳴り響く。鳴り響いた鐘が乳首とクリトリスを乱暴に振り回し、

カレナはその無様な姿を隠すことも許されないまま、壇上で派手に絶頂した。

絶頂が終わらぬうちに、突き上げられる男性器で絶頂

ツツが

そして徹底的に調教されてきた乳首とクリトリスを鐘が刺激してまた絶頂

野太い声を上げながら、派手に絶頂を続けるカレナを――



敵兵はさらに、
露わになった
カレナのクリトリスに
鞭を入れる。

強烈な刺激に
意識を失いかける
カレナだが、
男が子宮を揺さぶり
それを赦さない。

絶頂――
女にとつての至福。
それを与える
属国の女は、
帝国男性に
謝辞を述べなければ
ならない。

カレナは意識を
失うまで、
無様な交尾姿を
晒され続けた。

和平の鐘と
屈強なペニスに
与えられる快楽に
大声で感謝を
述べながら、
潮を撒き散らす
カレナ。

ふんふん
♡♡♡

んんん
♡♡♡

ハハハハ
♡♡♡

あああ
♡♡♡

ハハハ
♡♡♡



属国の女に、
当然避妊など
許されない。
男は容赦なく
カレナの膣内に
大量に射精した。

カレナにとって
生まれて初めて
受け入れる
精液。
それは、
騎士として、
王国民として、
そして女としての
敗北の証。

たつぷりと
中出しをされた
カレナの女性器が
広場の国民達に
よく見えるように
男はカレナの身体を
持ち上げる。

名前も知らない男の
子種を一杯に受け取り、
卑しく収縮を繰り返す
カレナの肉壁は、
侵略に成功した帝国側と、
侵略を受け入れるしか無かった
王国側の体制を
分かりやすく
物語っていた。

持ち上げられたまま
恥ずべき場所を
隠すこともできない
カレナは、

挿入された
男根の余韻と、
胎内から溢れ出る
精液の温かみを
感じながら、
静かな絶頂を
繰り返した。

その後も、
広場での式典は
夜通し続いた
という。

殺到した男共に
男根を振り込まれ、弄ばれ、
カレナは何度も何度も
絶頂を繰り返した。
玩具のように
いたぶられ、
お構いなしに
中出しを繰り返された。

最初は僅かな抵抗を
見せていたカレナも、
式典が終わる頃には
すっかり従順に
なっていた。
女として、
敗戦国の人間として
支配されるものの立場を
その身を持って
解らされたカレナは、

浅ましく絶頂を
繰り返した挙句
男たちに
命令されるたびに、
下品に乳と尻を
自ら振り回して、
鐘を鳴らして
絶頂した。

敗戦国の女に
誇りや品格は
必要無い。
ただただ
主人に従い、
卑しく媚び、
慰み者になり、
慈悲を請い、
男性器を
受け入れる。

誇り高き
騎士カレナは、
数々の調教を終え、
そんな属国の女の
代表に相応しい姿へと
作り変えられたのだった。

シェリーツ王女

帝国の進攻開始から数カ月、
王国は疲弊し、
城を明け渡す形での敗戦となった。
城に住んでいた王家の人間は、
次々と帝国兵の手に掛けられていったが、
王族の中でもひときわうら若く、
容姿の整ったシェリーンは目を付けられ、
侵略国の長、皇帝の前に連れ出された。

敗戦国の王族であり、
王女であるシェリーンに対し、
皇帝は、命を奪わない代わりに
シェリーンを
妾として迎え入れる
つもりがあると話した。

シェリーンは
その申し入れを断った。
生まれた時から王家の
人間としての気品を
体得してきたシェリーンに
とって、その提案は
あまりに侮辱的であり、
そのような辱めを
受けるのであれば
王族として誇り高き
最期を迎えるという覚悟が
シェリーンにはあったのだ。

しかし、その返事を聞いた
皇帝の反応は意外なものだった。
この状況でも自分の申し入れを
断るシェリーンの度胸を気に入り、
シェリーンの意見が変わるまで
待つことにしたのだ。

シェリーンは帝国兵により
城の地下牢に閉じ込められ、
意見が変わるまで
そこで過ごすようにと
命じられた。

ミャラ

うう……

……

全裸の状態で、股間には魔術を込めた紙切れが1枚薄ら笑いを浮かべながら紙め回すように身体中を見回す帝国兵に対しシェリーンはただ赤面することしか出来なかった。

そして次の瞬間身体を自由を奪われたシェリーンの身体に冷やかで不快な粘性の物体が絡みつく

この地下牢には、帝国によって品種改良された触手が放たれたのだ。

触手はシェリーンのその柔らかく豊満な肉体をはい回ると、魔術を込められた紙を避け肛門へと侵入しようとした。

シェリーンは戸惑いながらも必死に足を閉じ触手の侵入を阻もうとするが、全体を粘膜で覆われた触手には何の効果もなく、尻肉をかき分けて肛門に到達されてしまう。

やああ!!

ハァー

ハァー

ぬ?

ぬ?

ふふふ

ぬ?

ぬ?



勢いよく肛門に挿入された触手に
思わず驚き甘い声を
漏らしてしまうシェリン
感じたことのない異物感と
ジンジンと暖かい感覚に
肛門は本人の意思に反して
ヒクヒクと反応してしまう。

本来であれば
痛みを伴う肛門への挿入だが、
触手の身体から分泌される
粘液には、沈痛、そして
強力な媚薬の成分が
含まれている。

必死に抵抗を試みる
シェリンだが
抵抗しようとするほど
肛門に力が入り、
触手を締め上げ、
より刺激を受けてしまう。
さらに肛門を触手が
往復するたびに
媚薬効果のある
粘液が塗り込まれて行き、
あっという間に
シェリンの肛門は
快楽を生み出す
卑しい穴に成り下がって
しまった。

その感覚に戸惑い
今度は足を閉じようと
力むシェリンだったが、
数多の触手に四肢を
絡めとられ、肛門への
刺激が阻害出来ないように
足を大きく開かれ
固定されてしまう。

やあ、
ハハハ

ガハハ

あうあう

初めての絶頂を迎えた後も
シェリーンの拘束は
解かれることは無く
朝も夜もわからない地下牢
触手によつて肛門を
凌辱される日々が続いた。

ぬらあ...

絶頂時の肛門の不随意運動を学習しより効果的にメスに性的刺激を与えるよう品種改良されたこの触手は体組織を作り替え、自らの形状を変化させる。

ある時は不安定な体制で
肛門を曝け出され、
段差のついた触手を
時間にかけてねじ込まれた後
突然三氣に引き抜かれたり。

またある時は
無数の細長い触手に
肛門を方々から
引っ張られたり、
優しくくすぐるよう
に肛門の淵や直腸を
愛撫されたり。

挿入された触手を
内部でパンパンに
膨らまされた後

力づくで思いつきり
引っこ抜かれたり。

寝る間も与えられず
続けられる凌辱—
触手を受け入れる
ことによって
シェリーンの肛門は
みるみる敏感に、
柔軟になっていった。
そしてそのシェリーンの
身体の変化に合わせて
触手もまた次々と
新しい形の触手を
増やしていった。

1週間も経てば、
触手もシェリーンの肛門も
今までとは見違えるような
形になっていた。

シェリーンの肛門は
快楽を誘いこまんとばかりに
なまめかしく常にその口を
ぱくぱくど動かし、
そしてその周囲をうごめく
触手も、肛門に刺激を与え、
シェリーンを絶頂へと
導くための
工夫を凝らした
形状となっていた。

あまりにも禍々しい
その形状は、
シェリーンの肛門が
悦ぶ刺激を学習した
触手による最適解—
つまりこの形は、
シェリーンの身体が
無意識で望んだものだった。



身体を持ち上げられ、
肛門を頭上にした体勢のまま、
休む間もなくまた
触手による肛門開発が始まる。

より大きく、より凶悪に
進化したその触手を
乱暴に肛門内部で振り回され、
シエリオンは思わず
体中を震わせ、性器から
愛液を噴出させた。
その絶頂は、シエリオンを
失神させるほどの刺激だった

触手によって、
性交の経験がない若い王家の女性が、
もう二度と人間同士での交尾では
満足できない身体へと
変えられてしまった瞬間
そして触手は、シエリオンの絶頂を感知し
また自身の形状を進化させるのだった。

長い長い絶頂を終え、
また新たな触手を
咥え込もうと、
抜き取られた触手を
恋しそうに、
ひくひくと収縮を
繰り返すシエリーンの肛門

強制的に絶頂に押し上げられたシェリンは、さすがに残る意識の中で、皇帝への許しを請うたが、眼前には、より凶悪な形状をした触手が、肛門をめがけて迫っていた。

シェリーツの
この責め苦は休むことなく、
1カ月もの間続いたと言う。

かばあ

シェリオンが地下牢にとらわれて1か月休むことなくシェリオンが肛門を開発されている間敗戦した王国では帝国主導の元改宗政策、軍備縮小等が行われ着々と国力がそがれていった。

王室の解体もその政策の1つだった。王国民は帝国への抵抗を辞め、敗戦による混乱は一時的な終結を迎えていた。

人々が表向きに帝国からの統治を受け入れ始めた頃。帝国側は民衆への見せしめとしてシェリオンを民衆の前へと連れ出した。

今まで纏っていた王国の豊かさを象徴する優美なドレスは奪い去られ身につけることが許されたのはグローブとソックス、股間を隠すための腰巻1枚だった。

その腰巻も、ただでさえ秘所を覆い隠すには心許ない布地がそよ風によってひらひらと舞い、見え隠れする恥部に、かえって押しつけた王国民達の視線を集めてしまった。

今まで受けてきた地下牢での調教と違い自分が王家として君臨してきた自国の民の前に、裸よりも恥ずかしい格好で晒されていることに耐えかね、うつむいた。

王国都市部の広場に用意された拘束台上に恥部を全て曝け出させるよう計算された姿勢で、固定されたシェリオンは、

その様子を見兼ねて、帝国兵がシェリオンの尻をまるで家畜をあしらうように乱暴に打ち鳴らす。

シェリオンはその刺激で王国民の前で身を振り尻穴をヒクつかせると、絞り出す様に民衆に向かって声を上げた。

にききとび

ふうっ

んんん

んんん

んんん

やちん

キヤあん!!

んんん

ぽっかりと口を開いた
肛門を見せつけるように
腰の前に目一杯突き出し、
集まった民衆に手を振りながら
挨拶をさせられるシェリン。

みなさまあー
お集まりいただき
ありがとうございます

これからあー
ハッ穴いーっす
ほーいっす

高貴な王族の娘の口から
発せられる下品な言葉や
自ら恥部を曝け出し、
帝国兵の前で作り笑いを浮かべる
その情けない姿は、
今まで忠誠を誓ってきた君主の失墜を
王国民に思い知らせるには十分過ぎた。

民衆への挨拶が済むと、
シェリンの股下に
大きな箱が運ばれてくる。

帝国兵が箱を開けると、
ぬらぬらと光る粘膜に覆われた
大きな触手が、
ゆっくりと這い出して来た。

その禍々しい姿に民衆はどよめいた。
その触手はこの日のために
特別に飼育、改良された品種。
太ましい体躯を持ち上げ、
すぐにシェリンの肛門を探し始める。

地下牢と違い、衆人環視
しかも自国の民に
見られているこの状況、
シェリンは触手の侵入を阻もうと、
必死に拘束台の上で腰を振るが、

その姿はあまりに滑稽で
帝国兵の嘲笑を誘うだけだった。



触手はその纖毛で
尻肉を掻き分け、
すっきり口を
閉じられなくなってしまった
シェリーンの肛門を見つけると

うひゃあ!

時間をかけて丁寧に、そして強引に
開発されたシェリーンの肛門は、
押し広げられ、ぐりぐりゆとりと更に奥へと
その体軀を振じ込もうとしてくる
触手の動きに合わせ痙攣し、
本人の意に反して
快楽を生み出し絶頂してしまう。

性器からびゅるびゅると愛液を噴出させ、
拘束台に体を預け腰をくねらせる。
誰が見ても明らかな、盛大なアクメ

まずは纖毛を束ね、
ドリルの様に
肛門の中にそれを滑り込ませ
そして一気に
その太い体軀を振じ込んだ。

うひゃあ!

うひゃあ!

うひゃあ!

うひゃあ!

うひゃあ!

うひゃあ!

うひゃあ!

うひゃあ!

その姿を見た帝国兵は
すかさずシェリーンに
鞭を入れる。

思い出したかのように
シェリーンは慌てて、
大声で万歳を叫んだ。

帝国に占領された
この国では、
帝国兵によって
与えられるものは
全て敗戦国民への施し。

うひゃあ!

シェリーンは
国を代表する者として、
帝国兵から与えられた
肛門調教による快楽と、
この出し物に対し、
謝辞を述べるよう
教育されて来たのだ。

うひゃあ!

うひゃあ!

うひゃあ!

うひゃあ!

うひゃあ!

うひゃあ!

絶頂の波が引かないまま、
触手はシェリンの肛門に
勢いよく産卵を始めた。

他の品種と違い、
肛門内に無精卵を産みつけるよう
品種改良されたこの触手は
直腸内の環境に合わせ、
適した大きさの卵を産みつける。

無慈悲に体内に
産みつけられていく卵—
今まで感じたことのない
感覚でさえ、
性快楽へと変換してしまう
直腸に戸惑いながら、
シェリンの腹部は
みるみる膨れて行った。

十分に卵を産みつけ満足した触手は
肛門からその体躯を引き抜く。
異物を引き抜かれる際の快楽で
絶頂してしまわぬ様瀬戸際で耐える
シェリン。

敏感になった肛門に、
産み付けられた卵が下りてきてしまう。
これ以上絶頂しまいと、
卵を直腸内にとどめようとするが、

拡張され切った肛門は、
卵のツルツルした表面を
締め上げて押し戻すことはできず
少しずつ溢れ出して来てしまう。

それでも必死に—
これ以上の恥辱は
重ねまいと、

肛門に力を込めようと
足掻くシェリンだったが—



A speech bubble with a jagged border containing stylized Japanese text. The text appears to be "んがく" (Gaku) at the top, followed by "お..." (O...) and "すい..." (Sui...). There are also some smaller characters like "う" and "っ" interspersed.

本人の意思では
制御できない卵の排泄
肛門を卵がすり抜けていく度
足腰が抜けるほどの快楽が
シェリンソンの身を襲うが、
体制を崩すことは
拘束台が許さない。

そのまま直腸内に
握じ込まれた卵を
全てひり出すまで、
シェリーンは王国
民の前で無様なア
クメ姿をお披露す
ることとなつた。

卵が肛門から出なくなると、
帝国兵はシェリーンの
敏感になっていく肛門を押し広げ、
卵がすべて排泄されたことを確認した。

絶望した王国民の前に晒される、
快楽に絆絆されふやけきった
王女の肛門。

力なくぼっかりと口をだらしなく開けたその姿は、争いに敗れ、隷屬を余儀なくされた者の末路を物語っている。

尊嚴を破壊されたシエリーンに
追い打ちをかける様に、
帝国兵はさらにシエリーンに対し
何かを促す。

民衆に聞こえる様に、
施しを受けた感謝の言葉と、
折角産みつけてもらった卵を
無駄にしていってしまったことへの
謝罪をするシェリン。

ぜんぜんが……
出……っ……
……っ……
……っ……

も一回……
お願い……
……っ……
……っ……

そして
浅ましく施しをおかりするよう
命じられたシェリンは
もはや従順にその命令を
聴き入れるしかなかった。

シェリンからの
懇願を受ける
という形で

触手による
卵の産みつけは
何度も行われた

も……っ……
も……っ……
も……っ……
も……っ……

しかし何度行おうと、
シェリンの緩み切った肛門は、
卵を勢いよく吹き出して
しまっただけだった。

帝国兵はその姿を面白がって、
出来るだけ前へ飛ばせと命令した。
快楽で脳まで蹂躪されたシェリンは、
ただただその命令を遂行し、
民衆をさらに落胆させた。

何度産みつけても
体内から出て来てしまう卵。
それを学習した触手は、
その直腸の環境に合わせて
産みつける卵を
変化させていった。



最後には、
触手の産みつける
卵の大きさは、
大男の拳程の
大きさになっていた。

しかしどんなに
大きくなろうと、
シェリンの
緩みきった肛門は
卵を堰き止めることは
できない。

その動作はかえって
卵を外に押し出すことと
なってしまう

もう押し戻せない
ことを悟り、
排泄をすれば
今度は絶頂――

人間が生まれて初めて
味わう快楽――排泄行為。
それも、触手により
性器よりも敏感になった
肛門で行う排泄。

終わることのない帝国兵による
この公開肛門産卵プレイに
抗う術のないシェリンは、
力なく呻き声を上げるだけに
なってしまった。

次々と出てこようとする卵を、
押し戻すために息んで、
ひり出して絶頂し、
そしてまた触手が
卵を産みつける。

広場の奥では、
かつてシェリオンを妃として
迎え入れようと申し出たが
シェリオン本人によって
拒絶された皇帝が
その様子を見ていた。

あの時あの提案を
受けていれば――

そんな後悔すら
する暇もなく
シェリオンは
この広場のど真ん中で
絶頂を晒し続けた。

敗戦国の女に
選択肢はない
隷属か、陵辱。
待ち受けているのは
ただ、
その二つの運命。

この先も
それは
変わることはない。

？

？

？

終戦による
混乱が終わり、
帝国と王国には
和平条約が
締結された。

国交は整備され、
王国は帝国の
支配を受けながら、
王室の解体や、
改宗政策により、
かつての王国民
としての誇りを
少しずつ
忘れていった。

そんな王国と
帝国の間を、
一台の馬車が
往來していた。

それは、
帝国皇帝が
王国の支配占領から
帰還する馬車
もとい、
人力車だった。

なぜなら
皇帝が鎮座する
荷車を引いているのは、
馬ではなく

かつて王国に君臨し、
人々を守ってきた王族の姫君、
シェリンだったからだ。
あられもない姿で
拘束され、
口や乳首には
拘束具を付けられ、
その細い体で懸命に
荷車を引かされる姿は、
誰の目からも分かりやすく、
王国の敗北と、
支配の完了を表していた。

シェリンは
この屈辱的な醜態を
帝国の者たちに
見られまいと、
少しでも早く荷車を
引こうとするが――

王家で育った
華奢な肉体に、
乳首と性器に
取り付けられた
拘束具のせいでうまく
力が入らず、

この恥辱を長く
晒すことに
なってしまった。

人力車出発の前日、
シェリンは
皇帝に懇願していた。

かつて自分を「妻として迎え入れる」と慈悲深い言葉をくれた皇帝の思いを踏みにじり、その申し出を断ってしまった事への謝罪と――

度重なる屈辱的な調教を辞めてほしいこと、調教に屈し、皇帝の妻として、その身を差し出すことを皇帝に申し出たのだ。

しかし、シェリンのその申し出が受け入れられることはなかった。

卑しく全裸で土下座する元王族の姫君など、自身の妻には値しないと。

そして、この行動を見た皇帝は、シェリンをもはや姫君などではなく、自身の「家畜」として扱うことを決めたのだった。

帝国の広場にシェリンに引かせていた荷車を止めると、皇帝はシェリンに尻を突き出すよう指示した。

隷属を示す装飾品を尻穴から抜き取ると、

反射的に性行為を期待し、艶めかしく口をヒクつかせる。アナルが顔を出した。

お尻を突き出すよう指示した



初めて見る男性器に戸惑う時間もないまま、皇帝は家畜であるシェリーンに、その肉棒を尻穴で啜え込むよう指示する。

開発され切った尻穴は、もはや外の空気に晒されるだけでも性快楽を生み出してしまう。そこに差し出されたのは、皇帝の男根だった。

生まれて初めて受け入れる男根。しかも衆人環視の中、言葉すら発することを赦されず、

屈辱的な状況にも拘わらず、シェリーンは皇帝の上でよがっていた。散々開発された尻穴は、こんな状況でも性快楽を貪り、収縮を繰り返す。

情けない姿で
男根をケツ穴で
締め上げ

射精を
促すために
上下運動し
獣のような
声を上げる
シェリン

快樂と疲労で
腰が止まれば、
乱暴に突き上げられ、
体勢を立て直され、
そしてまた
射精のための
上下運動を
させられる。

惨めに自らの尻を
差し出す王国の姫君と
それを欲望を吐き出す
ために使う皇帝は、
まさにこの二国の
主従関係を体現していた。
そんな
シェリンの尻穴に、
皇帝は勢い良く、
たっぷりと射精する。

性感帯へと
変えられた直腸に
流れ込んでくる
熱い精液の感覚は、
それだけでも十分
シェリンを
絶頂へと押しやった。

シェリンへの
射精が終わると
皇帝は口の拘束具を外した。

本来の使い方を奪われ、
ペニスを押し込み
洗浄、射精をするための
場所として新たに
仕込まれた口。

拘束具を外されると、
一目散に先ほどまで
自身の尻穴を犯していた
ペニスをむしゃぶりつき、
残った精液をなめとり始める
シェリソン。

大衆の面前で、
一心不乱に性処理をする
シェリソンの浅ましさに、
帝国民達は、
好奇と蔑視の
眼差しを向ける。
皇帝はそんな
シェリソンの口内に、
さらに射精を行なった。

上の口からも
下の口からも
精液を垂れ流し
力なく民衆に
晒されるシエリン。
もはや王族としての
高貴さを見る影もなく
性処理専用の家畜と
成り下がったその姿は、
集まった帝国の男達の
欲情を煽った。

期待が高まる
民衆に対し、
皇帝は広場の中央に
拘束台を用意させた。

先ほど皇帝により
初めて尻穴への
挿入をされたばかりの
シエリンは、
何も知らされないまま
その場で拘束台へと繋かれ
放置された。

どんなに喚こうと
この国に敵国の姫君を
救い出すような
人間は居ない。
目の前に雌穴を
晒すように拘束された
美しい美女目掛けて、
広場の男達は次々と
集まって来たのだった。



一体どれくらいの男達を相手にしてきたか既にシェリンも分かっている。分かっていなかった。ぼっかりと空いた尻穴、口は当然気が付けば今まで守ってきた処女すら失っていた。

生まれながらに高貴な身分として王家に君臨してきたシェリンも、

こうして帝国民の男達の前に晒されれば性処理をするための穴に変わりのない。

処女のまま、尻穴側から丁寧に、そして強制的に自覚無く開発されていたシェリンの子宮は、シェリンに脳まで浸る。快楽を与えた。

初めて女性器で受け入れる。見ず知らずの男の男根に対しても敏感に反応し、最愛の人との性交時の様に愛液をまき散らす。

使い放題の穴に、ありついた男たちは、欲望の赴くままに肉棒を突き立て、順々に鬱憤を晴らしていった。

街中の男たちの
精液を全身で受け止め
拘束台の上で
シェリーンは
その小さな身を
震わせていた。

たった二日で
優に百人以上の
男達の肉棒を
三穴で受け止め
穴という穴から
精液を垂れ流しながら
未だ収まらない強烈な
アクメの余韻に浸る
シェリン。

これが、
勝者と敗者。
征服と支配。

最初から素直に
皇帝からの申し出を
受けていれば、
こんなことには
なっていなかった
かもしれない。
そんな後悔も、
もはや家畜と成った
シェリンには
意味のないこと。

王族の娘として
生まれたシェリンには、
この先、
男たちの性欲を処理し、
晒し者にされる、
帝国の共用家畜としての
人生が待っている。

広場の中央に
シェリンは、
しばらくの間放置され、
男たちの便利な
性処理肉便器として
機能していたという。



帝国側の凌辱は
留まることを
知らなかった。
改宗政策や和平条約の
締結を皮切りに、
植民地と化した
王国内部は
さらなる混沌と
退廃に苛まれた。

帝国は
王国民の反乱を
抑止するため、
かつての王国民達の
心の支えであった
8人の女を
帝国都市部に住まわせ
帝国民の
慰み者にするこゝで、
王国民の戦意を削ぎ、
その立場を
確固たるものにしていた。

戦争終結から数年ー
女達は今でも、
敗戦国の十字架を
背負い続けている。

おらっ!!
キビキビ歩けっ

皆様
お待ちかねだぞ



街を一周
練り歩いたら
ご奉仕開始
だからな

しっかり
宣伝して回れよ

この街の皆様に…

ググ



帝国軍
おちんぽ
親善隊が
来ました〜

ってなw

うわw
なんだ
あいつらw

見ものだなw
敗戦国の
奴らだw

元王国民の女を
こうして国で
飼ってるんだとよ

責任を体で
払わせる為になw

みつ…
皆様あ♡

お集まり頂きい
ありがとうございます♡
ございますうっ♡

帝国軍所属う…♡
帝国おちんぽ親善隊
隊長カレナとお♡

同、
エイリス♡

シエリン
ですう…

本日はこの街にい…
名誉帝国女性として
帝国男性様のおちんぽ
接待に参りましたあ♡

今日一日
ご満足いただけるまで
私達の身体で…え♡
御遊び下さいませっ♡

くははw
なんちゅゝ
恰好w

人間としても
女としても
終わってんなw

まあおちんぽ用に
生かして貰えてるだけ
アイツらにとっては
マシかw

帝国おちんぼ親善隊
隊長カレナあ♥

元王国騎士団
の団長としてえ：
帝国国民の皆様♥

誠心誠意の謝罪とお♥
敗北宣言をお：
ここでさせて
いただきますう

ほおw
乳首とクリに
白旗かw

しっかり
謝罪しろよ?w
こっちはためえらの
国に迷惑かけられたん
だからよ

全身使って
勝者に媚びろよ?
ザコザコ騎士団
団長さんw

ううう：
ハイい♥♥











ほーらお姫様w
今度は上手に
ひりだせるかな？

もう出て
こないんじゃねw
相当デカいの
ぶち込んだからw

ひり出したら
浣腸液の人間噴水が
お披露目になる
だけだなw

頑張れw
頑張れw



おと
ストップ
ストップw

たふはるるるる
イヤあああ

帝国男性の皆様あ
本日はお集まり
いただきい
誠にありがとう
ございますう

皆様あ
お手元の指示棒で
エイリスに
アクメのお恵みを
下さああい

へへへww
こっちのシスターは
ずいぶん従順だなw

はー
帝国の皆様にい
女の一番の幸せは
おちんぽを恵んで
いただく事だと
教えていただき
ましたあ

じゃあ
そのチンポを
恵んで貰うには
どうするんだ？w

エへへ
こうやって
がに股でえ
おっぱいと
おまんこ丸出しにして
媚び媚びしますう





帝國
お前

お前

お前

ぶはは W W
母乳まで吹いて
やがる W

よかつたなあ
お前みたいな
色ボケ女

ちんぽ係として
飼って貰えて W

よし今度は
二本いくぞ W

お前





入ったじゃ
ねえかよ
ガバマンがW

おはー

おはー
おはー
おはー



おらWケツ上げて
アクメ宣言できるまで
終わんねえからな? W

どうしたW
さっきから
何言ってるのか
聞こえねえぞ W

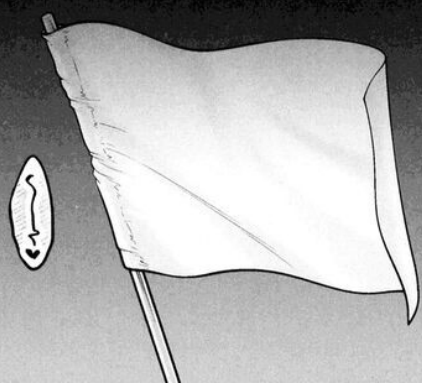
また
また
また

おはー

おはー



ふー
これで全員
出し切ったなw



うっわ
こいつらクツサW
全身ザーメン
まみれW

お勤め
ご苦労さんw
お陰ですつきり
したぜw

伸びてねえで
さっさと
次の街行けやw

仕事まだまだ
残ってんぞ〜

これからも
お国の為に
しっかりと奉仕
するんだぞw



おちんぼ親衛隊として

一生な…w

-Fallen Kingdom-
国辱の雌隼

-fin-

FANZA 同人



2024年8月12日 発行

発行者
とっくうき1号

著者
せぶんがー

連絡先
<https://sevengar.com/>



印刷
緑陽社

この物語はフィクションです。
18歳未満の購入、閲覧、所持を禁じます。
本書の無断転載、複写、複製を禁じます。

Reproducing all or any part of the contents is prohibited without the author's permission.
©2024 tokkuuki No1. all rights reserve.